

◎産業遺産を生かした独自の観光ツアー開発や夕張メロンを使った新たなスイーツ開発・ブランド化等を支援し、夕張市の集客向上につなげる

No. 1	夕張のあらたな魅力の発掘・発信に向けた中間支援コンソーシアム		
事務局	公益財団法人はまなす財団	実施エリア	夕張市

事業名
夕張の地域資源を活用した地域住民主体の観光振興及び 特産品開発・販売への中間支援活動

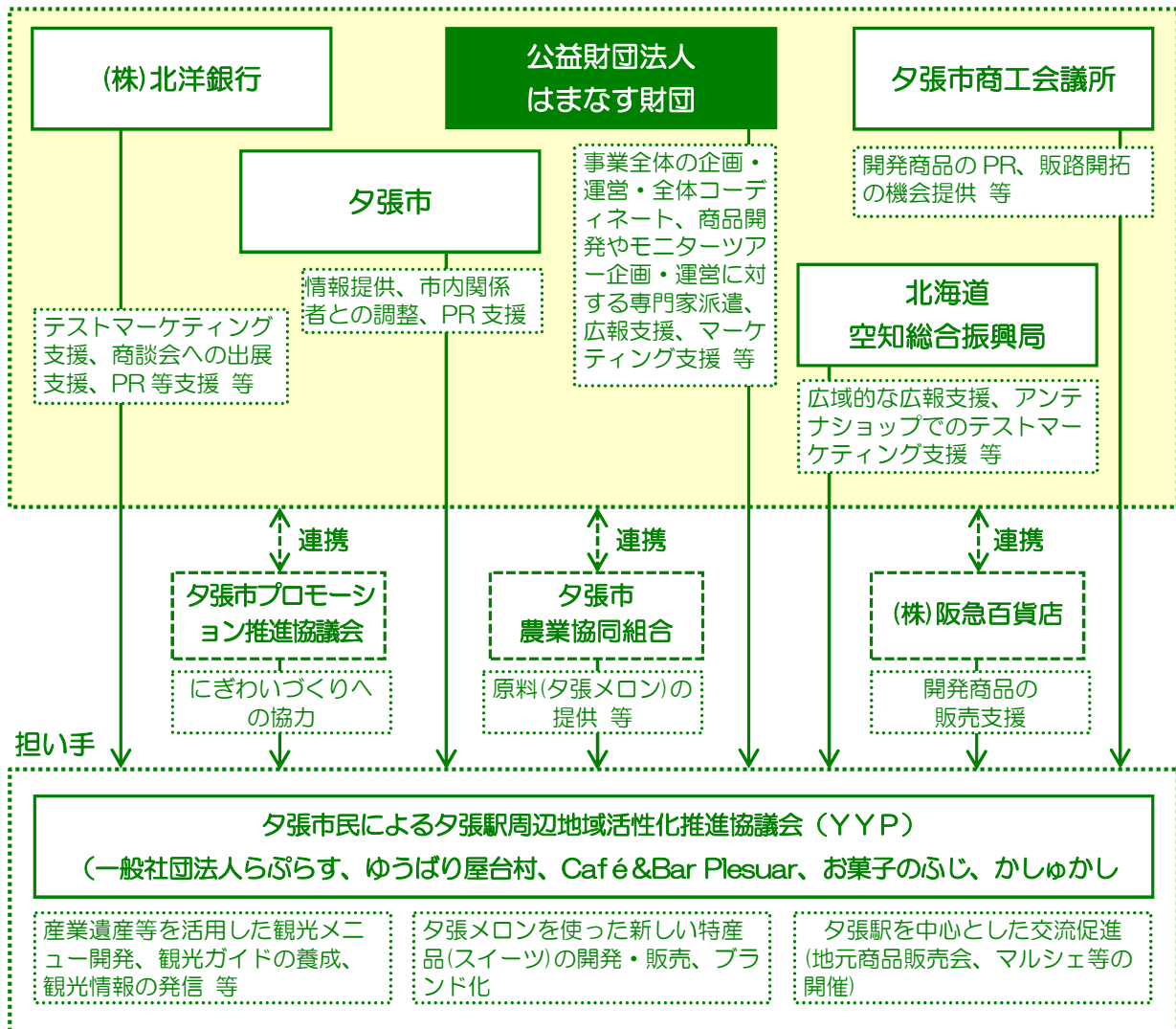
事業の概要
夕張市の活性化をめざして担い手（地元事業者のネットワーク）が取り組む夕張らしい観光資源の開発や特産品開発に対して、観光ガイドの養成や地域資源を活用したモニターツアーの企画・運営を支援するとともに、観光ワンストップ窓口の構築も支援する。また、夕張メロンを使ったスイーツ開発や販路開拓に向けた販売促進会や試食会開催の支援を行う。 ●担い手が行う地域づくり活動とは・・・ ①夕張市独自の観光振興に向けて、地元住民による観光ガイドの育成、魅力的な観光コースの設定とモニターツアーの実施等に取り組む。 ②夕張メロンを使った新たなスイーツ開発とブランド化に取り組む。 ③にぎわいづくりや魅力発信に向けて、Web 等による観光情報の発信や特産品の販売促進会を行う。

中間支援の概要	
担い手が取り組むガイド育成やモニターツアーの実施に関して、企画や広報を支援するとともに、マーケティングに関する支援も行います。また、夕張メロンを使ったスイーツの開発に関して、夕張独自の商品開発や統一ブランド化に向けたアドバイスを行うとともに、販売促進会での消費者アンケートを基に改善点の検討等も行います。また、Web 等を活用した情報発信支援も行います。	
主な構成主体	中間支援の内容
①公益財団法人はまなす財団	事業全体の企画・運営を担うとともに、全ての取組におけるコーディネートを行う。商品開発や販売、ブランド化等に対する専門家によるアドバイス、指導等も支援する。
②夕張市	観光コースの検討において、情報提供や市内の関係団体との調整等を行う。また、モニターツアーの実施等に関する広報支援も行う。
③北洋銀行	商品開発や販売に関して、事業計画の策定支援、テストマーケティングの機会提供や販路先の紹介等を行う。必要に応じて、商談会等への出展支援も行う。
④北海道空知総合振興局	24 市町からなる「北海道空知地域創生協議会」で取り組む広域的な広報やプロモーション展開の活用、アンテナショップでのテストマーケティング支援等を行う。
⑤夕張商工会議所	開発された商品を商工会議所独自の販促ツール（イベント等）を活用した PR を行う。必要に応じて、空知総合振興局、上部組織である道商連や日本商工会議所等の販促ツールを提供。

支援対象	地域づくり活動の内容
①夕張市民による夕張駅周辺地域 活性化推進協議会（YYP）	YYP は、夕張市内の事業者が連携し発足した任意団体で、夕張市を対象として、地域の活性化に向けた活動に取り組んでいる。本事業では、産業遺産や夕張メロンなどの地域資源を活用し、観光振興に向けた人材育成やモニターツアーの実施、夕張メロンを使った特産品開発等に取り組む。

実施体制

夕張のあらたな魅力の発掘・発信に向けた中間支援コンソーシアム



取組内容

取組①観光促進に向けた取組

夕張市民が有償の観光ガイドとして活躍できるようになることを目的として、市民観光ガイドの地域ビジネス化を支援した。また、夕張市内の観光事業者やスポーツ関連事業者などと連携を図り、夕張観光のあらたなメニュー構築及び事業化を支援した。

取組②特産品開発・販売とブランド化に向けた取組

YYPに参画する夕張市内の菓子業者や飲食店業者などに対して、地域資源である夕張メロンを活用したスイーツなどの商品企画や開発に対するアドバイスを実施するとともに、開発した商品を含め、YYPが扱う夕張特産品の統一ブランド化に向けたアドバイスを行った。また、YYPの販売促進に向け、販売促進会の開催や出展、バイヤー紹介などの支援を行った。

取組③にぎわいづくりと魅力発信に向けた取組

YYPに対して、地域コンテンツの収集、データ整備、HP開設等についてのアドバイスを行い、Web等を活用した観光や特産品など夕張の魅力や情報の発信強化を支援した。また、YYPが夕張駅周辺を市内外への地域情報発信拠点と位置づけて開催する、新商品や特産品の販売促進会の企画・運営に対してアドバイス等の支援を行った。

1 中間支援の活動プロセスにおける課題と対応

プロセス	支援対象	中間支援の内容	成果・効果
取組の背景・動機	・タ張市は財政再生団体であり、財政再建を最優先とするため、地域活性の基礎となるべき産業振興策や住民に必要な施設整備などが制約されたことにより、地域の活性力の弱体化が懸念され、タ張市民としての誇りまでも喪失せざるを得ない状況となっている。 ・住民や民間団体だけで地域活性化に取り組むには限界があり、かつリスクも大きい。せっかく発芽した地域活性化の芽を摘むことが無いよう、リスクを最小限とするため、ハンズオンによる支援が求められている。 ・地域づくり活動の担い手となるＹＹＰは、タ張駅周辺を拠点として、地域の活性化に向けた活動を自らが主体となって取組むために、地元事業者を中心に発足した任意団体である。ＹＹＰ結成後に、自ら地域づくりに向けた具体的な活動を進めるにあたって、地域活性力の弱体化が進む現実にはぶつかり、その課題の大きさにどのような優先順位をつけて取り組めば良いかわからない状況になった。		
体制構築のきっかけ		・はまなす財団は北海道および北洋銀行との間で人事交流等の連携が図られていることに加え、北洋銀行は北海道及びタ張市の指定金融機関であるなど、タ張コンソを構成する主体間で強固な連携関係を有している。 ・それぞれが連携することで、はまなす財団単独による支援以上のきめ細やかな支援効果が期待できた。	・事業実施以前より、人事交流等の連携があったこと、指定金融機関であったこと等から、はまなす財団を中心とした体制の構築に至った。
支援対象の選定	・本事業の実施以前より、はまなす財団が独自に実施する地域づくり活動発掘・支援事業という地域づくり活動に対する支援事業の中で、ＹＹＰに対する中間支援が行われていた。	・本事業の実施以前より、はまなす財団が独自に実施する地域づくり活動発掘・支援事業という地域づくり活動に対する支援事業の中で、ＹＹＰに対する中間支援が行われており、継続的かつ重点的な支援が必要と考え、支援対象として選定した。	・今後のタ張市の活性化を担う団体の選定に至った。
商品企画・開発	・タ張市の観光促進に向けて、観光資源の掘り起しと発信が課題となっていた。 ・また、観光振興においてはタ張市民の理解と参画が重要であった。 ・観光ガイド養成講座の受講生の自信と経験につなげるための実践の場が必要であった。 ・新たに開発する商品に関して、まずは地域の理解が重要であり、また、商品開発のメインがスイーツであることから、若い世代の意見反映が重要であった。 ・商品としての価値を高めていくことが重要であり、ＹＹＰは「タ張メロン」商標の許諾取得という高い目標に挑むことを掲げた。	・札幌ゆうばり会（札幌在住のタ張出身者の集まり）、大手旅行会社の営業担当者等を対象としたモニタリングツアーの企画・運営を支援し、観光資源の洗い出し、課題整理につなげた（ツアーガイドを研修生が担当）。 ・タ張市内の観光事業者や有識者を講師として呼び、観光ガイド養成講座の企画・運営を支援（H28.12.15～H29.2.16で計8回）。 ・平成29年3月2日から6日までの5日間で開催される「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」に合わせて、ゆうばり観光案内センターで受講生の観光ガイド研修を行った。 ・札幌市内の専門学校と大学にて、試作したメロンスムージー、パウンドケーキの試食会・意見交換会を実施し、試作品に対する評価や改善策などについてＹＹＰメンバーと意見交換を行った。 ・地元高校の先生や生徒も商品試作に参画し、焼き菓子の試作品づくりが進められた（来年度は地元高校の教育課程の中に特産品開発のカリキュラムが設けられる見込み）。 ・「タ張メロン」はタ張市農業協同組合（JAタ張市）の商標であり、そのブランドの許諾には、原材料や品質管理等について高いレベルが求められるが、許諾取得へのＹＹＰの高い熱意を踏まえて、JAタ張市との協議を積み重ねた。	・観光ガイドとして市民が観光振興に携わる下地ができた。 ・タ張市の観光ルート開発のきっかけにできた（成果と課題を抽出）。 ・観光ガイドとしての自信の醸成につながった。 ・札幌ゆうばり会がＹＹＰの活動に対して高い関心を持ち、今後も継続して支援していくことが決まった。 ・試作品をつくり若い世代の多様な意見を出してもらい、次へ反映させるという積み重ねが品質向上につながった。 ・JAタ張市からＹＹＰの特産品開発への取組みについての本気度が理解され、JAタ張市からは特産品開発についての技術的な協力を受けることが可能となった。また、JAタ張市の紹介で「タ張メロン」商標許諾商品を扱っている道内メーカーからの原材料のアドバイ

			スを受けることができた。
デザイン	• YYP メンバーが個々に商品開発を進めているものの、個別の展開に留まっていた。 • 今回開発した商品も含めて、地元商品にタ張全体としての統一感を持たせることで、商品としてブランド力を高めていくことが重要であった。	• YYP との意見交換を踏まえながら、デザインの専門家に協力してもらい、専門家のアドバイスを踏まえて、タ張ブランドの統一ロゴの決定を支援した（最終的なロゴマークの決定は YYP に任せた）。 • デザインの専門家を講師に呼んだ勉強会を開催し、パッケージデザインの重要性等について学ぶ機会を持った（菓子の素材よりもパッケージや製品のデザインで「メロン感」を出すことが重要等）。	• 全体コンセプトやロゴマークの制作等により、商品単体ごとではなく、統一的なブランドとしての PR ができるようになった。
販路開拓	• 開発した商品も含め、タ張の様々な特産品の認知度向上が課題であった。 • タ張市内の事業者間の連携や一体的な取組が求められていた。	• 札幌市内の食関連のイベントやプロバスケットボールの試合会場、帯広市でのイベントでスムージーの試験販売を支援した。また、タ張市内の菓子店 2 店舗等の既存商品の直売会も行った。 • 平成 29 年 3 月初めに開催されたゆうばりファンタスティック映画祭でも、YYP メンバーによる直売会を支援した。	• 新商品やタ張の特産品を広く知ってもらう機会ができた。 • タ張市内の事業者間の関係づくりにもつながった。
広報・プロモーション	• モニタリングツアーの効率的、効果的な集客と広報が課題であった。	• 全国を対象にモニターを集めて実施するにはかなりの労力が必要であり、担い手への負担も大きくなることが想定されたこと、まずはファンづくりが重要だと考えたこと等から、札幌ゆうばり会への周知と参加依頼を行った。 • また、取組を取材して記事として発信してもらうために、メディア関係者にもツアーへ参加してもらった。	• 札幌ゆうばり会のメンバーの満足度は高く、今後も YYP への支援に関わっていくことが決まった。 • モニターツアーの内容が新聞記事として掲載された。
モチベーションの維持・向上	• 担い手が課題にぶつかったりしてモチベーションが下がったり、活動が停滞することが心配された。 • 活動のさらなる活性化に向けて、YYP メンバーの意識の向上と、より多くの地元事業者の参画が重要であった。 • タ張市内の事業者間の連携や一体的な取組が求められていた。	• 多い時は週に 3～4 回、タ張まで出向き、面と向かって担い手の相談に乗るようにした。 • ロゴマークの決定等、活動の方向性を決める場面では YYP の意見を重視した。 • 新商品の広報・プロモーションや販路開拓では、新商品に限らず、既存のタ張の特産品も含めて行った。	• 担い手に寄り添う形での支援ができ、担い手の安心感につながった。 • テスト販売での消費者とのやりとり、スムージー等の商品が売れた経験等が、YYP メンバーの自信とやる気につながった。 • イベントを通じた連携により、関係づくりが進んだ。

2 中間支援のポイント（取組の中で見られた工夫・取組が上手く進んだポイント等）

①実践的な学びの場づくりを通じたタ張市民の観光ガイドの育成

タ張市の観光促進に向けて、観光資源の掘り起しと発信が課題となっていた中で、タ張市民にいか理解してもらい、参画してもらうかが課題となっていた。

そこで、タ張市内の観光事業者や有識者を講師として呼び、タ張市民を観光ガイドとして養成する観光ガイド養成講座の企画・運営を支援した（H28. 12. 15～H29. 2. 16 で計 8 回）。ここでは座学が中心となったが、実践的な学びの機会もつくることで、受講生に自信をもってもらうとともに、スキルアップやモチベーション向上にもつながると考え、平成 29 年 3 月 2 日から 6 日まで（5 日間）開催される「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」に合わせて、ゆうばり観光案内センターで講座の修了生が観光ガイドを実践する研修を行った。

これにより、修了生の観光ガイドとしての自信やスキルアップにつながるとともに、今後のタ張市の観光振興における人材づくりのきっかけにもなった。

②担い手の活動に対する地元からの理解や参画を促す支援

新たに開発する商品のブランド力を高めて販路を開拓していくためには、まずは地域からの認識と理解が重要ということ、また、新しく開発する商品がメロンを使ったスムージーや焼き菓子といったスイーツであったことから、地元の若い世代の意見を聞く場をつくることにした。

そして、若い世代の率直な意見を聞き、それをスイーツ開発に反映させて商品の質を高めていくことを目的として、札幌市内の専門学校と大学において、試作したメロンスムージー、バウンドケーキの試食会及び意見交換会の企画・運営を支援し、試作品に対する評価や改善策などについてYYPメンバーと意見交換を行ってもらった。ここでは、試食の後に、見た目、美味しさ、食感、メロンの味・香り、甘さ、値ごろ感等について評価してもらうとともに、意見も出してもらい、商品の改善に役立てる材料とした。試作品をつくり若い世代の多様な意見を出してもらい、次へ反映させるという積み重ねが品質向上につながった。

また、試作品づくりにおいては、地元高校の先生や生徒も参画し、焼き菓子の試作品づくりが進められた。これがきっかけとなり、来年度は地元高校の教育課程の中に特産品開発のカリキュラムが設けられる見込みとなった。

地域資源を巡るモニタリングツアーでは、札幌ゆうばり会（札幌在住の夕張出身者の集まり）を対象としたツアーとしたことで、夕張出身者の地元に対する危機感と活動に対する深い理解を醸成する機会となり、来年度以降も継続して札幌ゆうばり会から支援していただくことが決まっている。

③担い手だけでなく地域が一体となった取組を重視

これまで、夕張の様々な特産品の認知度向上が課題となっており、そのためには夕張市内の事業者間の連携や一体的な取組が求められていた。

そこで、札幌市内の食関連のイベントやプロバスケットボールの試合会場、帯広市でのイベント等では、新たに開発したスムージーの試験販売を支援するとともに、夕張市内の事業者の既存商品の直売会も行った。また、平成29年3月初めに開催された「ゆうばりファンタスティック映画祭」でも、YYPメンバーによる直売会を支援した。

これにより、新商品や夕張の特産品を広く知ってもらう機会ができ、夕張市内の事業者間の関係づくりにもつながった。

④密なコミュニケーションの重要性

体制の拠点である札幌から夕張市までは距離があったが、担い手が課題にぶつかったり、相談をうけたりした場合には、すぐに車で向かい、面と向かって話すようにした。多い時は週に3～4回も足を運び、寄り添いながら支援することに留意した。これにより、密なコミュニケーションができ、お互いの信頼関係の醸成にもつながった。

3 支援対象の成果

観光ガイドの養成に関する取組では、ツアーバス搭乗可能到達者、市内観光施設案内従事到達者、観光案内センター業務従事到達者それぞれ、当初の目標を達成する結果となり、観光案内センター従事については目標を超える人数が達成された。

担い手（YYP）が扱う商品の年間売上についても、平成29年1月末の時点で目標を超える結果となった。

夕張駅周辺の来訪者数については、36,000人と当初の目標を大きく超える結果となった。これに

は、3月初めに開催された「ゆうばりファンタスティック映画祭」による効果も大きいものと思われる。

表 成果目標の達成状況

成果指標	事業開始当初	目標	達成状況
① ツアーバス搭乗可能到達者	0名	2名	2名
② 市内観光施設案内従事到達者	0名	3名	3名
③ 観光案内センター業務従事到達者	0名	5名	7名
④ YYP参画メンバーが扱う商品の年間売上	—	4,000千円	4,080千円 (平成29年1月末時点)
⑤ 夕張駅周辺来訪者数	24,000人 (平成26年度年間実績)	年間26,000人	年間36,000人 (平成29年3月時点)



モニタリングツアーの様子



開発したメロンスムージー



テスト販売の様子



試食会の様子

4 地域づくり活動支援体制としての成果と課題

◎地域づくり活動を支援する体制の構築

地域づくり活動を担い手のみならず地域を巻き込んだ活動とすることの重要性を体制間で改めて認識できた。また、公益財団法人はまなす財団は夕張市外の民間団体であることから、夕張市内における地域内の利害関係等の制約を比較的受けないことから、市内に拠点がある体制メンバーでは困難であった関係者の調整等を担うことができた点も、協力・連携を図る上でのメリットとなった。

◎地方公共団体、金融機関と連携することによるメリット

体制に地方公共団体や金融機関が入ったことで、担い手等から体制に対する信頼や安心感が生まれた。また、観光ガイド養成講座では夕張市が中心的に支援を実施など、体制メンバー間での役割分担ができたことも良かった。

商工会議所や金融機関が参画しているため、今後、資金的な相談や事業展開に向けての相談がしやすくなる関係が築けたことも大きなメリットとなった。

◎中間支援活動や担い手の活動資金を確保する手法の検討

継続的な支援を実施するにあたり、活動資金の確保は課題となるが、基本は、はまなす財団の独自財源を活用する形で継続する。また、構成主体の補助金や助成金などを財源としながら、国の補助金なども積極的に活用して活動する。

加えて、YYP に対する支援に関しては、開発した特産品などの売上の中から、一定割合を YYP の活動費とすること等も検討し、活動費確保を図る。

5 地域づくり活動支援体制としての今後の展望

◎担い手に対する継続的な支援

YYP の地域づくり活動を自立的な活動として継続していくことが可能となるように当年度を事業化に向けた助走期間として設定し、重点的に体制整備や試験的、実践的な取組を実施した。

来年度以降は、事業化の自走開始と加速を図ることを目指し、YYP の事業化に向けた進捗やニーズに応じて柔軟なハンズオン型の中間支援を引き続き実施する予定である。

◎新たな担い手に対する支援予定

YYP では、基本的に YYP の活動に対して賛同する者が自由に入会することを可能とした任意団体として組織運営を実施しているため、YYP の現在の活動メンバーが取組を通じて成功事例となることにより、地元菓子店や観光事業者等の新たな参画希望者を積極的に受け入れていく方針である。

平成 29 年度以降、YYP の発足メンバーとともに、新たに参画した地元の事業者に対し、抱える課題やニーズに応じた中間支援を実施していくとともに、YYP の活動が夕張市内や空知総合振興局管内などに波及し、この活動をモデルとした新たな地域づくり活動団体が生まれるように YYP の活動を支える。